



写真1



写真3



写真2

写真1：アンナプルナIV峰踏破の代替として登頂した標高6200mのチュルーフからの風景 登頂成功を示す旗が見える。1952/10/23 写真2：チーズ干しを見る川喜田二郎（右上） ガネシュ・ヒマールの麓のトロゴンパコーラ（ネパール）。1953/7/15 ヤク、ヒツジ、ウシなどから得られたミルクは、バターやチーズにも加工される。 写真3：ピムタコーチ（ネパール）で休むチベットとの物流を担うヤクの群 後方はマナスル峰。



探検の時代の科学研究—ヒマラヤと華北の植物—

第2次世界大戦後間もなくの頃、人文地理学的情報の収集に多くの学者が海外の探検に出かけていた。1980年ころまで続く探検の時代である。大阪公立大学の前身には探検家として、農業生物学の¹⁹¹⁶⁻¹⁹⁹³中尾佐助（浪速大学・大阪府大農学部1949-1980在職）、文化地理学の¹⁹²⁰⁻²⁰⁰⁹川喜田二郎（大阪市大文学部1950-1960在職）、植物生態学の¹⁹¹⁹⁻²⁰¹¹吉良竜夫（大阪市大理学部1949-1981在職）らがいた。探検の領域を引き継いだ植物学者には、大阪府立大学農学部卒の¹⁹³³⁻¹⁹⁹²西岡京治（ブータン国王からダシヨウの称号を受ける）や¹⁹³⁵⁻²⁰¹⁵堀田満（元鹿児島県立短期大学学長）がいる。大阪公立大学の前身には実証的な探検科学の担い手がいたのである。

探検の時に記録されたノートや画像とともに、採集された植物標本は、現地の実情を証明する根拠となる貴重な学術資料である。中尾の著作の根拠となったフィールドノート、スライドなどは中百舌鳥図書館の「中尾佐助コレクション」として収蔵されている。また、標本の一部が中百舌鳥キャンパスの教育研究フィールド（農場）のロッカーに残されている。

探検では、未踏の高山の踏破だけでなく、事前の準備

から行程中に起こる様々な課題の解決も含まれる。ヒマラヤ山脈のマナスル峰（8163 m）周辺の探検は、インフラ調査とルート開発を目的にした1952年の第1次派遣、マナスル峰の登頂を試行した1953年の第2次派遣が実施されているが、自然や人間生活の実相も収集資料とあわせて記録されている。探検学は、未踏の山岳の登頂を競うだけでなく、「地理的情報が空白な地域と研究の空白な分野に道を開く」学問である。中尾は、1次派遣の1952年8月～12月に、マナスル峰の西に位置するアンナプルナ峰の北側からマルシャンディ川の渓谷を歩き、2次派遣では1953年3月末～8月中旬に川喜田とともにダウラギリからマナスルを経て中部ネパールの学術探検を実施している（写真1～3）。中尾と川喜田は、ヒマラヤ研究の実績から秩父宮記念学術賞を受けている。

中尾が採集した植物標本には、内モンゴルとネパールのエンバクとカラスムギ（1945年、1962年採集）、アッサムの浮きヒエ（1959年採集）、ヒマラヤのシャクナゲ（1962年採集）、西アフリカのシアバターノキ（1968年採集）、マレーシアの食虫植物（1978年採集）などがある。現代の農学者は興味も示さない植物標本であるが、標本のメモ



大阪公立大学・高専基金へのご寄附のお願い

お申込み時に「特定プロジェクトのために：⑨-3、⑨-7」を選択してください。（⑨-3：1号館ミュージアム構想のために ⑨-7：大阪府立大学創基140年事業のために）

【お問い合わせ】 渉外企画課 TEL: 06-6605-3415
<https://www.omu.ac.jp/fund/>

編集発行

大阪公立大学 大学史資料室
協創研究センター・大学史編纂研究所

杉本キャンパス学術情報総合センター6階（大学史資料室）
Tel : 06-6605-3371 E-mail : gr-gakj-archives@omu.ac.jp



写真4



写真5



写真6



写真7

写真4：ユーマイ 1946年の日本での試験栽培品 写真5：ユーマイ（写真4の拡大）ハダカエンバク（2倍体）と誤認されてきたがユーマイは6倍体である。 写真6：エンバク（徳島県祖谷溪産） 写真7：ロードデンドロン・グリフィティアヌム「花は黄色、11 Apr. 1962. インド西ベンガル州ダージリンのシェルパ族の喫茶店で。葉は手で透かされ、花には象牙白色の黒点がある。」と英文でメモされている。 写真8・9：ロードデンドロン・トムソニー 花は深紅。 写真10・11：ロードデンドロン・ホジソニー 東ネパール グンサ付近のヤムテン氷河で。花はピンク。

*写真は、中尾佐助コレクションのスライドDB（写真1～3、9、11）と植物標本（写真4～8、10）を用いた。



写真8



写真9



写真10



写真11

とスライドと著作を読むと、当時の研究の様子がよくわかる。次に、中尾の探検に沿って、その一部を紹介する。

標高の高いヒマラヤとチベットには特有の植物に依存した現住民の営みがある。この地域は北緯28度付近に位置し、標高が上がると極寒の雪山、標高が下がると熱帯のジャングルになる。人々は家畜の飼養や穀物を栽培できる標高2500mほどの温帯林の地域で生を営んでいるが、ヒマラヤの南麓と北麓は降水量の違いによって、家畜も農作物も異なる。標高3500mを越えた草地に住んでいるヤクは、チベットとネパールやブータンの間の交易に従事して、緑の無い時期は住民から与えられる麦やユーマイのような牧草に依存して暮らしている。

ユーマイ（燕麦類）：中尾は第2次世界大戦の終わりの頃、現地召集を受け、二等兵として内モンゴルを歩きエンバク（写真6）の一種ユーマイを収集している。その穂を大切に持って佐世保の港に帰国し、勤務していた木原生物学研究所で、種子をまき植物学的に分析して、赴任した浪速大学の紀要に報告している（Nakao 1950）。ユーマイ

は特殊な穂を持つ品種である（写真4、5）。この品種は、もみ殻を剥がさなくても麦粒を集められる。ユーマイと東アジアの麦畑に生える雑草のカラスムギには共通する特徴があり、ユーマイは東アジアのカラスムギから選ばれた作物である。この研究を端緒とした農作物と農業技術の伝播論から後の農耕起源論（中尾1966、1967）が生まれている。現在、ユーマイは、ヒマラヤの北麓になるチベットからモンゴルの高原で栽培され、現地の少数民族は粉にして加工し、ユー麺と呼んで食べている。

シャクナゲ：8種9枚の押し花標本が保存されている。中尾は1953年にカトマンズで竹籠で運ばれる深紅の花房をつけたロードデンドロン・アルボレウム (*Rhododendron* はツツジやシャクナゲの属名) を見ている。1962年の東ネパール探検の押し花標本には鉢植えで観賞される園芸的に貴重な種も含まれており（写真7）、自生種では灌木のロードデンドロン・トムソニー（写真8、9）や、ヒマラヤの温帯林で大木になるロードデンドロン・ホジソニーなどがある（写真10、11）。（大阪府立大学名誉教授 山口裕文）



資料室だより

◆大学史資料室では「大阪公立大学 大学史資料室 NEWS LETTER」を発行しています。大阪公立大学の貴重な学術資料や大学の歴史を紹介いたします。◆この「NEWS LETTER」は、大阪市立大学「140周年展+大学史資料館（大学博物館）設立準備 NEWS LETTER」の後継紙であり、「大学の知を発掘！」の番号を引き継いでいます。両紙とも大阪公立大学 大学史資料室のホームページ、図書館ホームページの機関リポジトリで公開しています。

大学史資料室からのお願い

現在、学内にある資料の所蔵調査を行なっています。学術資料そのもの、研究の過程で残された資料類、実験装置や器具類、実習に用いられた教材や作品などを、大学史にかかわる資料とともに探しています。候補となる資料がありましたらご一報ください。

→杉本キャンパス学術情報総合センター6階 大学史資料室

Tel：06-6605-3371